# タイル

TILE

YU MIRI

柳美里

## 純文学なのにホラー

狂気、殺意、ストーカー、監禁……
現代日本の日常にひそむ恐怖を描いた
芥川賞受賞第一作

# タイル

TILE

江苏工业学院图书馆
藏书章

柳美里

YU MIRI

文藝春秋

柳美里（ユウ・ミリ）
昭和四十三年、神奈川県生まれ。
高校中退後、東京キッドブラザースを経て、
昭和六十三年、劇団「青春五月党」を結成。
平成五年、「魚の祭」で第三十七回岸田國士戯曲賞を受賞。
平成八年、「フルハウス」で第十八回野間文芸新人賞、第二十四回泉鏡花文学賞を受賞。
平成九年、「家族シネマ」で第百十六回芥川賞を受賞。
主な著書に、小説『家族シネマ』（講談社）、『フルハウス』（文藝春秋）、エッセイに『家族の標本』（朝日文芸文庫）、『柳美里の「自殺」』（河出書房新社）、『私語辞典』（朝日新聞社）、『水辺のゆりかご』（角川書店）、『窓のある書店から』（角川春樹事務所）、戯曲に『魚の祭』（白水社）、『静物画』（而立書房）『向日葵の柩』（同）、『Green Bench』（河出書房新社）などがある。


タイル

平成九年十一月十日　第一刷
平成九年十二月十日　第三刷

定価はカヴァーに表示してあります

著者　柳美里

発行者　和田宏

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三一一三

印刷　大日本印刷
製本　矢嶋製本


©Miri Yu 1997
Printed in Japan
ISBN4-16-317300-5

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

タイル

装画協力　水谷嘉孝

装丁　原研哉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

部屋の明かりを枕もとの電気スタンドだけにして横になり、週刊誌をひろげると、〈極度の無気力状態から女を目醒めさせるものはなにもない〉という連載小説の一行が目に飛び込んできた。男は全裸でベッドに横たわる女になり、現実の世界から遠く離れた。この女は何日も何日もベッドの上でひとりの男と体を合わせている。男は小説のなかの女と自分の精神状態が酷似していることをうれしく思い、息を止めるようにしてページをめくった。この作家がおれのことを知る可能性はどれくらいあるだろうか。編集者はうわさ話をばらまくのが楽しみで阿呆臭い作家とのつきあいをなんとか持たせていると村上がいっていた。まぁいい、重要なのはこの小説のなかにおれが存在しているということだけだ。それにしてもどうしてこんなに暑いのだろう、エアコンがぜんぜんきかない、この部屋も小説のなかの部屋も八月だということが単なる偶然だとは思えない、暑い。

不動産屋に空室を案内してもらい、三つの物件に足を運ぶと、陽当たり、収納の数、駅までの距離などの条件を比較するのに嫌気がさし、となり近所とつきあわないで済む十二

万円以内のワンルームであれば見ないで即決すると伝え、ファックスで送られてきたこの部屋に昨日引っ越してきたのだった。前の住人が残していった白いブラインドのひもを引いてガラス戸越しに外を見たとき、二十メートルしか離れていない線路を走る山手線の吊革にぶらさがっている乗客と目が合って組み立てたばかりのベッドに倒れ込んで後悔したが、腕時計を見て時間を計ると、ほぼ三分の間隔でやってくる電車の音に奇妙な力を与えられるのを感じた。百八十秒に一回、通過音はメッセージをくれる。そのうちになにを伝えているのかわかるようになるだろう、それがひとびとの悲鳴か罵声かの区別ぐらいは。

男は軽いあくびをして週刊誌を置き、眠ろうと試みたが失敗し、思い切ってベッドから体を起こした。

嵌める、そうつぶやいたことも薄笑いを浮かべたことも男は気づいていなかった。反対方向からくる電車が通過し建物が揺れ動くような轟音を背中に浴びて、男は鍵のぎざぎざを指で撫でて穴に差し込んだ。カチャリと鍵がかかる音を聞いて満足して今度は意識的に笑い声をあげた。三時二分を指している腕時計をつけた右腕をゆっくり振りまわしながらエレベーターの前を通り過ぎ、階段を使ってロビーに降りた。管理人室の小窓には食事中という札が立てかけられている。陽射がべっとりと貼りつき遠近を失った街並を眺め、首

を左右に振ったあと男はマンションの前で一瞬立ちすくんだが、ふたたび通過する電車の音に感覚のすみずみまで揺さぶられ、コンビニで買わなければならない台所、浴室、トイレの洗剤、歯ミガキ、せっけん、トイレットペーパー、ゴミ袋などを頭に刻み込んでから歩き出した。

背中がひりひりして後頭部がドライヤーの熱をまともに受けたように熱い。とかげが目の前を走り、まだ夜の部がオープンしていないレストランのテラスの植木鉢の陰に隠れたような気がして、男は膝を折ってのぞき込んだ。「なんだよぉ」という声がして首をひねると、コック服の若い男が立っている。「とかげ」とぼんやりした声でいうと、「こんな都会にいるかよ、こっちにきて五年になるけどよぉ、おれ見たことないもん。おれんとこの田舎だったらさぁ、石垣に二、三十匹のとかげが出たり入ったりしてるけどよ、いないいない、いるわけねぇだろうが」となか指をおや指で弾いた。男には若いコックがせせら笑っているのか感傷にふけりたいのかわからなかったが、「あっいる！」と小さく叫び、「まじかよ」と両手をついてひざまずいた若いコックを残して歩き出した。

マンションから五分も歩けば若者たちが蝟集するファッションの街がある。男が歩いている場所は住宅街だが、それでもあちこちにアパレル会社が点在している。このあたり一

帯をすべて飲み込んでしまうはずだった開発の波がいつのまにか失速して中途半端に取り残されたという印象がする場所だ。到底販売が目的だとは思えない商品の見本を飾っているショーウインドーを、妻の読みさしのファッション雑誌をパラパラとめくるように眺めながら歩いた。妻は男がめくった指の痕や食べ物の屑が付着しているページを見つけると、口には出さないが決まって左眉をわずかに吊り上げた。妻はいったいいつごろから怒りを冷凍しておくようになったのだろうか、男は記憶をたどってみる。ことあるごとに鮮度のない怒りを解凍してその場の雰囲気に合わせて調理しては男に差し出すのだった。男のなかで妻の記憶がどろりとした憎悪に解けて動き出し、彼女がはじめてはっきりしたキャラクターを持った女として立ち現れたように思えた。額から瞼に汗が流れ落ちて目をしばたたかせ、男は暑さに身ぶるいした。右腕の肘を曲げて顔に近づけると鳥肌がたっている。妻のせいでできたのか、暑さのせいなのか、「場合によっては」と声に出し、太陽に向かって目を細めてつぎの言葉が押し出されるのを待ったが、なにも思いつかずただ口をぽかんと開けただけだった。

突然つばも飲み込めないほどののどの乾きを感じて自動販売機を探したが見当たらない。血走った目を左右に動かしながら歩くと、交差点の角に販売機があるのを見つけて走り出

したい衝動に駈られたが、男の脚の筋肉ははっきりとした拒絶を示した。自動販売機の前のビルから、下駄を履き髪にかんざしを何本も突き刺した女や、大きな造花を髪に挿したロングスカートの女の一団が流れ出てきた。販売機の前にはラッパースタイルの男たちがたむろしている。糞ッ、と毒づいて販売機を通り過ぎながら見上げると、〈現代デザインスクール〉とレリーフされた看板がかかっていた。場合によっては、この道は歩かないようにしようと心に決めた。いつごろからそうなったかはあやふやだが若い男女を見ると殴りつけたくなる自分に不安を感じ、彼らが視界に入るたびに落ち着かない気分に陥る。いまもあの男たちを殴りつければ暑さものどの乾きもふっ飛ぶような気がして、なんとかこの道を通らないで済む方法を考えなければ、と自分にいい聞かせた。

大通りに出て、車道の向こう側に伸びた男の視線は〈ローソン〉で留まった。左右を見て通り沿いにある薬局と〈サブウェイ〉を記憶してから、横断歩道を渡って〈ローソン〉のドアを押した。いつもなら蛍光灯の下に立つと頭からレントゲンをあてられたような不快な気分になるのに、陽射に視神経をやられたいまはやわらかで透明感あふれた光に感じられる。汗で湿った首の骨あたりが冷気にさらされて急速に乾いてゆく。この店の設定温度は何度なのだろうかと男は店内を見まわした。妻は真夏でも真冬でも室温を二十度に設

定していつもカーディガンを羽織っていた。繰り返しフラッシュバックする妻の記憶を振り払い、レジ前の棚から単1、単2、単3の電池と延長コードをつかみとってかごに入れた。コンビニに入るたびについ電池に手が出てしまうのは、テレビのリモコンや目覚し時計や電気カミソリの電池が切れたときに買っておけばよかったと後悔するのがいやだからだ。棚を移動して、ティッシュペーパー、トイレットペーパー、トランクス、靴下、ランニングシャツを入れるとかごはいっぱいになった。入口に戻ってかごを二つ持ってきて一つは通路に置き、もう一つにシャンプー、せっけん、歯ブラシ、歯ミガキ、洗剤類をかたっぱしから放り込んだ。品物に手を伸ばしてかごに入れるときの腕の筋肉の伸び縮みが心地よく、男は八年ぶりに自分ひとりで占領する部屋を思い浮かべ、うずくような快感がこみあげてきて飲物コーナーに行き、ウーロン茶、アイスコーヒー、アイスティーのペットボトル、コカ・コーラ、トマトジュースの缶をかごに入れた。ファンタグレープをつかんでふたを開け、ひと息で飲み干すと目の奥が痛んだ。空缶の始末に困ったが、ファンタ一缶で正気を取り戻しまちがいのない判断をくだせるのは喜ばしい、とかごのなかに投げ込んだ。楽しくやっていける。男はみなぎってくる力を感じとり、ローラースケートでスーパーマーケットを走りまわるアメリカ映画のシーンを思い出し、空のかごを手にしてすべ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るように通路を動きながら手あたり次第に商品を詰め込んだ。
四つのかごをレジ前の床に置き、その内の一つをカウンターにのせた。中年の女店員はつぎつぎにバーコードを読み取り機に押しつけていく。男がかごが空になったのを見計らってつぎのかごを持ち上げると、店員はバーコードの読み取りに集中しているふりをして目のすみで一度に大量の買物をした男の顔を盗み見た。三つめのかごの空缶を手にした店員は顔をあげ真正面から男の顔を見て、となりのレジの若い男の店員に救いを求めた。ひと目でバイトだとわかる若い男はレジを移動して黙って商品を袋に詰めはじめた。
「それね、飲んじゃった。金は払いますよ、バーコードのその機械なんていったっけ？」
店員は空缶を手に持って読み取り機に目を落としたまま答えない。その顔が赤らんでいく様を目にした男は口笛を鳴らしたいほどの喜びがこみあげてきた。
「知らないの？　そう、とにかく計算してよ。空缶は棄ててね、持って帰ってもしょうがないから。お手数かけて悪いけどのどが乾いてがまんできないことってあるでしょう、あるよね。あっ、そうだ、それバーコーダっていうんじゃなかったかな、ちがった？」
いい終わらないうちに店員は読み取った空缶をカウンターのすみに置いた。男はこの女のこめかみに読み取り機をあてるとどんな数字が出るだろうと想像して、しゃっくりのよ

うな笑い声をたてた。
「一万六千八十二円です」店員はぱんぱんにふくらんだ七つの袋を前にして怒りを隠そうともしないでいった。
「持てないなぁ、無理だよねぇ、どう思う？」男は左の耳たぶをつまんで首を傾げた。硬直して動こうとしない目の前の女への憎悪が錨のように垂直に下りてきて、男は高いところに立ったときの足のかゆみを感じ、「持てないよなぁ」とつまんだ耳たぶをこすった。
店員は銀色のマニキュアが光る爪でレジの縁を叩きながら、
「一万六千八十二円です」その声にはキチガイ、カネハラッテハヤクデテイケという副音声が入っていた。
男はポケットから何枚かの折りたたんだ札を取り出し二万円を抜いたが、「どうやって運ぶんだろうな、どう」と店員には渡さない。
「持てる分だけお持ち帰りになったらいかがですか。持てない分はお預かりしておきますから」
「なるほど、それマニュアルなの？」
店員の顔はストッキングでもかぶったように一瞬にして憎悪で歪んだ。

「なるほどね、そういう手もあるよね。でももう一度ここにとりにくるっていうのはどうかなぁ。暑いし、すごくたいへんだよね」そういって男は外に目をやった。決定的瞬間を撮しとった写真のようにガラス戸の向こうでは夏が静止している。

「もう一度とりにこいなんてよくいえるな、キサマ」男は夏に顔を向けたまま静かにいった。歩道から灰色の影が押し寄せてきたかと思ったら、陽光が波のようにそれを打ち返し、ふたたび影が路面を覆い尽くしたとき、男は恐怖を感じて目を逸らした。

「返品できるかな」

「どれとどれを返品なさいますか？」店員は顔の歪みを修正して早口でいった。

男は二つの袋を持ち上げ、一品ずつもとの棚に戻した。支払を済ませてカウンターの上の袋を二つ、カウンターの内側にまわり込んで店員の足もとに置いてある袋を三つ腕にかけて店を出た。

首をひねって空を見上げると、太陽は男の頭上で傾くことを拒否してぶるぶるふるえていた。いまごろ妻は後悔しているにちがいない、そうでなければ記憶からこう何度も妻の顔が這い上がってくるわけがない、あとで送るといった荷物が届かないのはもとの鞘に収まることを期待しているからだ、と男は思った。

妻は65㎡の2DKのマンションを所有していた。名義上は彼女の父親のものだったが生前贈与と同じことだ。どちらがそのマンションで棲もうといい出したかははっきりしないが、結婚を決めたのは妻だったということは断言できる。同棲して三ヵ月経ったとき妻がいった言葉を忘れていない。

結婚したいの？

もしあのとき否定していたら妻はどういう反応をしただろうか、と考えて男は少しだけ自信を取り戻した。離婚をいい出したのも妻のほうだった。

離婚したい、そうなのね？

そうなの、と妻に訊かれたのだからそうなのだ。そうなのね？　そうさ。離婚に同意してあらためて部屋を眺めると、いっしょに暮らす以前から鎮座している妻の所有物から男の物がみすぼらしく浮き上がって見えた。同棲してから買った物のなかで所有権を主張できる物があるだろうか？　ベランダのパラボラアンテナから29インチの大型テレビに目を移し、二年前近所にオープンしたディスカウントショップで買ったとき、足りなかった四、五万円を妻が出したことを思い出した。

テレビが欲しいのね、そうなの？

と妻に訊かれ、ああ持って行くよ、と思わず声を荒らげてしまい、男ははじめて離婚の実感がこみあげてきて滲んだ涙を気取られまいと背を向けたまま立ち上がった。

デザイン専門学校の前の通りを避けて、およその見当で最初の角を右に折れ、十分ほど歩きつづけても茶色い屋根瓦と白い壁の七階建のマンションは目に入ってこない。男はまだ番地もマンションの正式名称も憶えていなかった。左手の肘の内側にビニール袋が食い込み、右手の指先は千切れそうだ。舌がざらつくほどのどが乾いている。男は袋のなかのウーロン茶を取り出そうと思って、狭い庭から枇杷の樹が這い出るように伸びて道に濃い影を落としている民家の石段に袋を置いた。腰を下ろそうとしてつまずき、前にのめって両手についた泥をズボンにこすりつけて袋からボトルを取り出し、胃が苦しくなるまでウーロン茶を飲んで自分の頭にかけた。首から胸へ、背中から腰を伝って流れ落ちトランクスに染み込んでいく。目に入ってあわてて手の甲でぬぐったが痛みは強く、男は何度も目をしばたたかせた。ウーロン茶の冷たさは瞬間に失せ、小便を洩らしたときのような不快感が鳩尾のあたりまで迫り上がってきて、男はボトルを前の家の自転車めがけて投げつけた。

「なにしてるんですか？」

声のほうに顔を向けると、同窓会に出席した主婦という感じの派手さと固さがアンバランスな服を着た女だった。説明しようとして口をひらいたが声が出てこない。汗とウーロン茶のしずくが指先から石段に落ちて染みをつくっていく。

「どうも……昨日、このへんに引っ越してきたんですけど、道に迷ってしまいまして」

「どいてください、わたしの家です」女の声からは湯気が立ち昇っている。

「暑い、そう思いませんか、奥さん。でね、まだ番地をおぼえていないんです。茶色の屋根が目印のマンションなんだけど、どこにも見当たらない。この荷物でしょ、それにほら、この暑さ、どうしたらいいんでしょうね」男は体のどこかが痙攣しているのを感じて眉をひそめた。

「交番で訊いたらいいでしょう」とつねるようにいうと女はぐいと前に出た。男は体をかわし女に階段をゆずって袋をとろうと身をかがめたとき、階段を上がるスカートのすそと剝き出しのふくらはぎが目に飛び込み、痙攣が全身にひろがってうなり声を発し、女のスカートをつかんでまくりあげ、石段を飛び降り、袋を拾って走った。女の金切り声に背中を突かれてスピードを早め、頭をのけ反らせて笑い、笑いながら袋を一つか二つ置き忘れてきたことに気づいたが惜しむ気持ちはなかった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com